兵庫県昆虫学研究史概説 (1)

高　橋　寿　郎

動物学，昆虫学が日本に独立したのは明治以降のことであるが，それ以前では昆虫の研究は博物学の中に包含されており，その博物学が本草学から分化し，物産学や名物学というようになったのは江戸時代まづ元禄からといえる。

日本では中国から儒仏に伴ってわが国に伝来した本草の学は薬に関する知識の培力となったが，7世紀以降17世紀に致る久しい才日の間は著しい発達を見ない暗黒時代であった。

ところが近世になって江戸時代の文教の興隆に伴い，本草学は薬物学として発達したばかりでなく，更に物産学や名物学となりその中から博物学が育った。

江戸末期に洋学の知識が入ってくるとともに日本を訪ねる欧米人も多くなり，日本の昆虫学の発展が之等欧米人によってなされるようになった。兵庫即ち神戸も兵庫の港として古く開けたので欧米人の来訪者の多くが兵庫に立寄り或いは滞在して昆虫の採集をしており，その関係で兵庫に関する昆虫の研究も日本の昆虫の研究とほぼ同じ位の時代から知られていることになる。

そもそも兵庫は古くから務古(ムコ)の水門(ミナト)或いは大輪田(オオワダ)の泊の名で知られ（約2～3000年前現在の会下山の南のふもとに栄えた部落がさらにその南の大輪田の泊～大和田の泊～を生み出した。これは播摂五泊の一つとして数えられた)。1868年12月7日に兵庫開港の名のもとに神戸浦が開港されて世界の港としてスタートした現在の神戸市が中心となっており，その他の地はほとんど調査されていない。

神戸という名は1879年4月に従来の神戸村と坂本村及び兵庫村が合併したことより始り，それ以前は神戸町又はその前は神戸村で合併迄は兵庫港の方が有名であった。兵庫港～大輪田の泊は平清盛によって築港工事が営まれて今日の発展の基をつくった。それ故古い文献には神戸より兵庫が出ているがこの兵庫はやはり現在の神戸市の一部であり，厳密には湊川より西が兵庫である（慶応3年12月6日兵庫開港の日，当時の兵庫とは湊川～いまの新開地本通り～から柳原の間の海岸地帯で人口約20,000人，戸数5,000余，神戸と呼ばれた地域，いまの生田区には走水，二つ茶屋，神戸の三村合せて4,000人，1,100戸ほどが散在していた—故郷燃える，幕末編，のじぎく文庫，1970）。

このように日本の昆虫学の基礎が欧米人の来訪によって出来たと同時に兵庫県における昆虫学の基礎もほぼ同じ時代から始まることになる。そこで兵庫県昆虫学の移り変りを主として文献によって調べて見ると共に現代の兵庫県昆虫学，兵庫県下の昆虫研究の概略を述べてみたい。

江戸末期迄。

西欧においては古代ギリシヤに既にアリストテレスのようなすぐれた動物学者が現われ，動物を科学的に観察することに成功している。

西欧でも日本でも動物学は医学の発達に伴って興ってきたことは同じである。

西欧では顕微鏡の発明により動物学は飛躍的に発達したのに，日本の方は6世紀に中国より伝来した医学の中に本草なる一科があり，18世紀になってその中から動物学が育った。本草は勿論中国に起ったもので，その基礎を築いたのは江蘇省円陽府稜陵の人，陶弘景であるとのこと，彼によりその頃伝存していた“神農本草経„を基礎として“名医別録„とを合せて“神農本草経„三巻，更にそれに注を加えて“本草集注„三巻（500年）を作ったが，之が日本に来て本草学の母胎となったわけである。昆虫の害は自然の一員として古き人達にも多かれ少かれ影響を与えたであろうから人間に直接関係のある虫は古い書籍の中にも当然出てくる。

古事記は8世紀始め和銅5年に出来上った吾が国現存の最古の記録である。日本書紀は古事紀より8年後，養老四年に完成したもので，之等両書の中には昆虫としては僅かにアギズ（蜻蛉），ハヒ（蝿），シラミ（虱），カヒコ（蚕），ハチ（蜂），アム（虻）の如き非常に身近な虫のみが出てくる。

“風土記„は官撰の郷土誌でそれぞれの動植物を載せている。残念ながら完全に残っているのはほとんどない。

“播磨風土記„も完全に現存していない。大体動物，鳥の記載は多く虫の名はほとんど出ていない。

“万葉集„はわが国最古の歌集であり，8世紀より以前4世紀余の期間にわたって謡まれたものを含み4,500首にあまる長短の歌謡の中，動植物に関するものは可成り多いが昆虫類はやはり身近かなもののみの様である。出ている虫はハチ，アリ，ハエ，カ，チョウ，ガ，カイ

コ，クワゴ，カゲロウ，セミ，ヒグラシ，ホタル，コオロギ，キリギリス，トンボである。

正倉院御物又は正倉院宝物として良く知られているものに“玉虫厨子„のあることは有名である。正倉院薬物の中にはミツバチの蜜蠟一蔦蜜，無食子一没食子一インクフシバチの虫瘿，紫鉱一ラックカイガラムシのラック等がある。

中国では4700年前既に養蚕法が知られており蜜蜂の飼育法，飛蝗の発生，生活，防除法等も3000年位前から知られている，しかし日本でも之等は古くから知られている。養蚕のことが日本の歴史上に出て来たのは一番古くは雄畧天皇の六年（462），“皇后自ら桑蚕の事を勤めたまふ，スガル（蜾蠃）に命じ国内のコ（蚕）を集めたまふに誤りてワカコ（嬰児）を集め来りたるによりチヒサコベ（少子部連）の姓を賜う„とある，その後継体天皇元年（507年）にも農桑を勤めたまうとあり，養蚕はその後日本では大いに普及したと考えられる。

恒武天皇の延暦15年（996），伊勢，三河，相模，近江丹波，但馬六カ国の女2人宛を陸奥に遣わして2年間養蚕法を伝習せしめたという記録もある。

皇極天皇2年（643）に蜜蜂の巣房四枚，百済太子余豊が三輪山に放ち養いしも繁殖せずというのが養蜂の日本で始めての記録であろう。

蝗の大害（これはイナゴだけでなく，メイチュウ，ウンカ等稲の害虫の総称）のことは文武天皇，大宝元年（701），清和天皇の貞観元年（859），同16年（874）等々に記録が出てくる。

江戸時代の始め，明の李時珍の名著“本草網目„が伝来した。天下が漸く安定した時でもあり，家康の奨学の政策と相まって本草学はここに学術として発足した。この“本草網目„は日本の本草家や博物家にとって聖典として珍重され，それぞれが基となって貝原益軒著“校正本草網目„（1673），稲生若水著“新校正本草網目„（1714），寺島良安著“和漢三才図会„（1713），小野蘭山著“本草網目啓蒙„（1803）等の名著が出てきた。

八代将軍吉宗の時代，所謂る享保時代（1716～1745）以前の主なる本草学者は京都にいた。ただ貝原益軒のみは福岡に住んだ。その当時吉宗は国産開発を奨励して各地に採薬使が派遣され，薬用植物を主とする調査が行われた。之に刺激された全国各地各藩にその地方の動植物や鉱物などを調査しようという機運が著しく勃興した。この“産物御尋„によってわが国各地の動物相や植物相が著しく明瞭の度を増したことはたしかである。各地の産物の報告書，目録帳，主要産物の絵図帳などは追々幕府に提出された。現在残っているものは極めて少いがその中に兵庫に関するものは次の如きものが記録として残っているが，その内容は全くわからない。

“播州網干産物之内絵図註書„（浅岡新兵衛）（元文2年，1737）。

その頃から本草学者が集って動植物あるいは鉱物などの品類を陳列して学者相互の研究に資し，あるいはまた一般民衆にそれら天産物の智識と趣味とを普及するのを目的とした物産会が始った。物産会は専ら江戸で開かれた（神田，本郷湯島等），第5回の会（宝暦12年）には一般の人の出品をつのり“摂津，播磨„からも出品があったと記録があり，それと相前後して大阪でも京都でも物産会は開催されている（文政甲中，1824。岩崎常正著“武江産物誌„は昭和42年上野益三博士によって覆刻され入手し易くなった）。

この時代の諸侯には博物学を好み，自ら著述を行い，動植物を写しあるいは画家をし写生させたのが少くなかった。熊本藩主，細川越中守重賢（銀台侯）は各地の動植物の写生図をつくること夥しく“虫類生写„は明和2年東山道通過の時の写生が多く，中に“播州のとんぼう„というのがある（本書は1969年細川家名宝展として宝塚ギャラリーで展示され見る機会を得た）。この物産会から本草学あるいはそれ以外の文学書，史書等の群籍に現われた動植物などの名称が何物を指すかを考証するのが名物学であり，主として有用動植物や鉱物などをしらべ進んでその栽培養殖の方法や利用などを考究する，又ある特定の地方の動植物の種類や効用などを調べあげること等を物産学といった。

文化文政以後江戸の博物学は益々隆盛の域に達し動物のみを研究する学者が現われるようになった。それに対抗するように名古屋にも一派（尾張学派）が出て斯学の研鑽につとした。それ等の内有名な書としては水谷豊文の“虫譜„（昆虫，直翅目，75種，鞘翅目，約60種，半翅目約30種），動物分類学の基礎として生物分類の基本を種なる概念におくとした伊藤圭介著“泰西本草名疏„3巻（文政12年），大河内存真著“虫類写集„，吉田雀巣庵（平九郎）の“虫譜„特に“蜻蛉譜„，栗本丹州著“虫譜„（所謂る栗氏虫譜，栗氏千虫譜，丹州虫譜，文化8年，1811年ともいわれている）。飯室楽圃著“虫譜図説„12巻（安政3年丙辰，1856年）等々がある。そしてこの頃より外国人の日本訪問が始ると共に Linne の分類による影響も出て次第に動物学より別れて昆虫学として独立した学科としての道を始めることになる。

（1—Ⅳ—1973）